『往生礼讃聞記に学ぶ』

【資料】　新宅昌紀

『往生礼讃』の専雑得失　西本願寺註釈聖典　七祖篇より

四得十三失

「もしよく上の如く念々相続して、畢命を期となすものは、十はすなはち十ながら生じ、百はすなはち百ながら生ず。」

「なにをもってのゆゑに」

①「外の雑縁なくして正念を得るが故に」

②「仏の本願と相応することを得るが故に」

③「教に違せざるが故に」

④「仏語に随順するが故なり。」

「もし専を捨てて雑業を修せんと欲するものは、百は時に希に一二を得、千は希に三五を得。」

「なにをもってのゆゑに」

❶「すなはち雑縁乱動するによりて正念を失するが故に」

❷「仏の本願と相応せざるが故に」

❸「教と相違するが故に」

❹「仏語に順ぜざるが故に」

❺「係念相続せざるが故に」

❻「憶想間断するが故に」

❼「回願慇重真実ならざるが故に」

❽「貪・瞋・諸見の煩悩来り間断するが故に」

❾「慚愧・懺悔の心あることなきが故なり。」

「又」

❿「相続してかの仏恩を念報せざるが故に」

⓫「心に軽慢を生じて業行をなすといへども、つねに名利と相応するが故に」

⓬「人我おのづから覆ひて同行善知識に親近せざるが故に」

⓭「楽ひて雑縁に近づきて、往生の正行を自障障他するが故なり。」

「なにをもってのゆゑに。」

「余、このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雑異なることあり。ただ意(こころ)をもっぱらにしてなせば、十はすなはち十ながら生ず。雑を修して至心ならざれば、千がなかにも一もなし。この二行の得失、前にすでに弁ぜるがごとし。」

「仰ぎ願はくば一切の往生人等よくみづから思量せよ。すでによく今身にかの国に生ぜんと願ずるものは、行住坐臥にかならずすべからく心を励まし、おのれを剋して昼夜に廃することなく、畢命を期となすべし。上一形にありては少苦に似如(に)たれども、前念に命終して後念にすなはちかの国に生じ、長時永劫に

つねに無為の法楽を受く。すなはち成仏に至るまで生死を経ず。あに快きにあらずや、知るべし。」

『往生礼讃聞記』より

本法院義譲講師説　安政二乙卯年四月十五日開講

◇専雑得失について

○若能如上等、三には専雑得失を判ずるに三あり。初めに正しく得失を判ず。二に重ねて得失を決す。三に結びて勧む。

初めの中に二あり。初めに正しく明かし、二に別して所由を示す。

今は初めなり。これよりは専修の得失を決判して、難行難修（雑行雑修か？）をすてて、只専ら称名念仏すべしと、専称名字の専修念仏を勧め給う。（略）今家の祖師聖人は、『化巻』［一二の一七四～一七七等］に於いて、別して深細に雑行正行専修雑修を分別し給う。（略）

問うて云わく。雑行雑修と正行専修との同異いかん。

答えて云わく。善導・元祖の御釈によれば、雑修即雑行なり。（略）。然るに今家の祖師聖人の御判釈によればしからず。正雑二行は行体の差別なり。専修雑修は能修の機の不同とし給う。其の義、『化巻』［一二の一七四～一七七等］を開きて見るべし。御釈まことに御精密なり。（略）。近くは和讃［一一の二八・一八六］に「こころはひとつにあらねども」等と宣ぶにても知るべし。（法然聖人の御釈は大判、親鸞聖人の御判釈は細判等と云々）。されば祖師聖人の『化巻』の細判によれば、雑行にも専修と雑修あり。正行にも専修雑修あり。正しく専修を論ずる時は、専ら正業を修するを専修と云い、余行を兼修するを雑修と云う故、善導・元祖の大判と異なることあるに似たりと知るべし。（略）

○若能如上等、如上とは、総じて上をさすなり。此の礼讃、これより上に安心起行、作業を明かして、安心には三心を明かし、起行には五念門を明かし、作業に四修を明かせり。其の次に『文殊般若』の一行三昧を明かせり。それをば今此に総じてさして、上の如くと宣ぶ。上の如くとは、総じて上をさす言なれども、其意は、善導正しく『文殊般若』の専称名字の一行三昧をさすこころなり。其の証拠には、念々相続の言ありて、この念々相続は、もと『文殊般若』の経文なること、先に已に申せし如し。（三心も五念門も四修も南無阿弥陀佛と云々。）

十即十生は正しく専修の徳を標しあげ給う。此の文並びに次の随順仏語故と云うまでの文、『行巻』［一二の二二］に引用したまえり。

◇四得について

①無外雑縁等とは、第一の得なり。この外の雑縁と云うも、種々の解あれども、外対内言（外は内に対することば）、正念と云うが内に決定する安心のことなり。其の内の安心の正念に対して、雑縁のことを外と云う。雑とは間雑の義、雑乱の義、内の安心を雑え乱す縁を雑縁と云う。和讃［善導讃］の雑縁の左訓にマジル

ミダルとある、これなり。これ間雑雑乱の義なり。其の雑縁と云うは、教と人と処となり。教は、雑行を教えすすむるが縁となることなり、人とは、雑行を修する人に雑れば、ついに雑行を修するようになるなり、処とは、雑行雑修を修する場所に入れば、ついに雑行を修するようになることなり。所謂散善義の四重の破人のごとく、これみな内の正念の安心をかき乱す故、雑縁と云う。正念と云うは、『末燈鈔』[二一の一]に、「正念といふは本弘誓願の信楽定まるをいふなり」と、仰せられてあり。しかれば正念は本願の信楽、金剛不壊の信心を正念と云う。

②與仏本願等、これは第二なり。上の如く念々相続の行者は、弥陀の第十八願の通りの安心にて、よく本願にかなうと云うことなり。

③不違教故、第三なり。釈尊の教意に違背せぬなり。

④随順仏等とは、諸経証誠の語に随い奉ることなり。『法華玄義三』「相応とは随順の義」とあり、仏語に相応することを随順と云う。この仏の本願と相応することを得るが故に等の三故は、次てのごとく弥陀・釈迦・諸仏の三仏なり。又大経・観経・弥陀経にもあたるなり。此の如き四つの因あるによって、十即十生百即百生の利益をうると、上を成ずる意なり。

◇雑修の失について

○若欲捨専等、二つには雑修の失を明かすに二あり。初めに総じて失を示す、二には別して所由を弁ず。今は初めなり。此の段の礼讃の文、鎮西では正行即専修、雑行即雑修とするこころなり。今家ではしからずと云うこと、先に弁ずるが如き。さりながら、これを唯初めから雑修のことと弁ずるもあれども、それでは礼讃の文が快く解されぬなり。これが所謂雑行を雑修に約して明かすの文と心得て解すべきなり。

○百時等、この一二五三とは、少分を顕すなり。問うて云わく。今此の文に一二五三の往生を許したり。其の唇の乾かぬ間に、次に下の文に千中無一という。豈に是、前後相違自語相違に非ずや。答えて云わく。（鎮西派、西山派の解釈を略す）。更に又当流の宗義より云うときは、雑修の人に一二五三の往生を許すは、化土に約する義と云うべし。若真実報土にのぞめていえば、同一念仏無別道故のゆえに、雑修にては一二五三もかなはず。よって下の文に千中無一と宣ぶ。しかれば一二五三と千中無一と、化土と報土と、其の義門異なれば、更に自語相違の失を招くことなし。

○何以故等、二には別して所由を弁ず。この初めの四失は、上の専修の四得に反して知るべし。

◇要門の九失

❶雑縁は行と教と人と処との四縁に随うことなり。別して自ら雑行雑善に心をうつし、或いは異学異見の人に惑乱せらるる等、これなり。

○失正念故とは、これ第一故なり。決定往生の正念なきことなり。和讃［一一の

二九・一九九］には「信心乱失するをこそ、正念うすとはのべたもう」と、内の信心なきゆえに、外の雑縁に乱動せらるるなり。

❷與仏等とは第二なり。称我名号の誓いを信ずるこころなり。助正間雑するゆえ、不相応と云う。

❸與教等とは、第三なり。「釈尊汝好持是語」［二の三〇］の教勅に違背する失なり。

❹不順仏等とは、第四なり。「当信是称讃」［三の五等、六方段］の諸仏の語に順ぜざることなり。

此の如く弥陀・釈迦・諸仏の三仏の本意にそむけり。豈になんぞ往生すべけんや。この四失の中、第二の與本願不相応故の因故が重きなり。それゆえ和讃に十三失の中、初めの二を挙げたもう中、「本願相応せざるゆえ」等と宣ぶ。

然れば本願と相応するゆえ、正念うるなり、本願と相応せざるゆえ、正念を失することなり。雑修の行者も念仏を称えるけれど、定散自力のこころにて助正間雑するゆえ、本願に相応せず。本願に相応せざるゆえ、雑縁来たりみだるなり等の、余の十二失がきそいおこりて来ると云うこころなり。

○❺係念不相続とは、係念は大経に係念我国とあり。観経に係念一処想於西方とある、是なり。しれた通り、心をかけることをなり。よってこの係念不相続の文は、只係念すれども相続せず。憶想すれども間断するがゆえに、回願すれども信心慇重真実ならざるがゆえにとよむがよしと、開轍院（随恵師1722～82）も申されてたり。されば係念すれども相続せずとは、一向に心をかけぬではなし、隨縁係念すれども、真心が相続せぬことなり。誠の係念なれば、心を一境に住せしめ、弥陀に心をかけ、浄土に念をかけて相続すべき筈なり。昨日は弥陀に心をかけ、今日は大日薬師に心をかける等、心の替る事をば、係念不相続と云う。これ第五の失なり。

❻憶想等とは、これは第六なり。専修正行の行者は、憶念の心常にして間断あることなし。（冠頭讃に、弥陀の名号となえつつ信心真に獲る人は憶念の心常にして仏恩報ずるおもいあり）。雑行の人は折々思い出せども、其の後からそれを捨てるが如し。

問うて云わく。係念と憶念とよく相似したり、其の差別云何。答えて云わく。『決疑鈔』に二義、『私集鈔』に三義あれども煩わしく弁ぜず。これは係念不相続は、想いのかけ処がかはるの失なり。憶想間断は、かけた想いが続かぬ失なり。然れば一行の中に於いて、初めを係念と名づけ、後を憶想と名づけると心得るべし。

❼回願等とは第七なり。回願は即ち発願なり。慇は慇懃の義、重は叮重の義、ねんごろなることなり。慇重ならずとは、ねんごろならぬ粗略なることで、恭敬修のかけたる相なり。専修の行者は、仏の回向発願し給う処なるがゆえに、願心相続して慇重真実なり。此の係念と憶想と回願とは、一口にいえば一心の始中修（初中終？）なり。不相続と間断と不慇重不真実とは、一口にいえば虚仮の相な

り。これは雑行は所修の行体の失なり。雑修は能修の機の失にて、此の三故も能修の機失なること、文にありて顕然たり。

❽貪瞋等とは第八なり。貪瞋は知るべし。諸見は『理趣分讃下』に諸見は五見なり。即ち横に推度するなり。所謂心見・辺見・邪見等の五見なり。外道の邪見のことなり。（略）。専修念仏の行者は、貪瞋諸見にさえられて間断せず、三毒の煩悩は屡（しばしば）おこれども、まことの信心は少しもさえられず、貪瞋煩悩はおこれども、中間の白道は水火のためにさえられず、西へ行く道一筋はあるものを、烟（けむり）も波も立てば立てかしと、雑修自力の行者は、おこる煩悩をふみとめんとするゆえ、却りてまけをとりて憶想間断するなり。専修の行者は、経てば立てかしと、おこる煩悩が却りて仏恩を喜ぶ縁となるなり。

❾無有慚等とは、これは第九なり。専修正行の人も、凡夫の性得は無慚無愧なるがゆえに、仏願に乗じ他力をたのむ手前では、常に慚愧懺悔の思いあり。雑修自力の行者は、己が自力の功をたのむゆえ、まことの慚愧懺悔のこころなし。

◇真門の四失

○又不相続念等、これは雑修十三失の中、第十なり。

又と又隔の言あり。これより段落のかわること、著し。此れに於いて総じて此の十三失を分別するに、上来弁ぜし初めの九失は、外に望めて失を成ずるなり。此の礼讃の又の字、眼を著するべし。さてその初めの九失の中、初めの四は、上の専修の四得に反し、第五六七八九は、行相につく失なり。又の後の四失の中、初めの一は（十三失でいえば第十）、上の仏に向うての失なり。後の三つは、下も人に向うての失なり。なお又『広文類』の御引用をいえば、此の十三失の文を、『化巻』二か所へ引き分け給えり。初めの九失を、『観経』の要門の下へ引き給い、後の四失を『阿弥陀経』真門の下へ引いてあり。然れば『観経』の修諸功徳の機の失へ九つ、『小経』の善本徳本の機の失へ四つ、合して十三失なり。これ恐らくは祖師聖人、「又」の字を眼を付け給い、其の所明に心を付けたまいての巧妙なる御引用と窺われるなり。（鎮西云々略す）。

❿不相続等、専修念仏の行者は、偏に仏力をたのみ、自力の功をつのらざるゆえ、常に仏恩を念報して、其のよろこび限りなし。其の相は、「弥陀の尊号称えつつ」［一一の三五・二六七］等、又「釈迦弥陀は慈悲の父母」［一一の二九・一九二］等、宣ぶにて知るべし。自力の行者は願力不思議を知らず、自力の功をつのり、我つとむる助正の力で往生を期するゆえ、仏恩を念報すべき筈なし。和讃に［一一の二九・一八四］「一心を得ざる人なれば、仏恩報ずる心なし」とのたもう事なり。不相続とは、仏恩を思う憶念の相続せざることなり。そもそも当流に常に談じたもう仏恩報謝の念仏、願成就の経意の、一念発起平生業成の義より出たることにて、種々の道理あること勿論なれども、正定業の念仏を、報謝の念仏と称すること、豈に此の礼讃の文、明快たる証文に非ずや。『和燈』の元祖聖人、基親に答え給う御言葉、照合して窺うべきことなり。常に出ることなれば、煩わし

く弁ぜず。

⓫心生軽慢等、第十一失なり。軽慢とは、『法界次第上』自ら恃（たの）んで他を軽んずるを軽慢と云うとありて、雑修の行者は、我なればこそ、此の功徳を修すれと、他を軽んじ自らを高ぶるが軽慢なり。名利は貪欲よりおこる愚痴の一分なり。自力の行者は、其の煩悩の相応し、煩悩にさえらるるゆえに、名利と相応す。仏法修行の本意は、徳をつつみ名をかくし、名利をいとい離るるこそ本意なるゆえ、麻の衣をかき合わせ、念珠をつまぐるも、人に帰依せられんと思う名利とのみ相応す。これ雑修の失なり。他力念仏の行者は、凡夫の性得として、名利を離るることはならねども、自らの功をからず、他力の行を仰ぎ行ずるゆえに、人に高ぶるべきものがらもなきゆえ、他を軽んぜず。名利を離るることならねども、仏祖の御冥見に耻じ入りて、名利と相応せざるなり。

⓬人我自覆等、第十二失なり。人我とは、性相家の所判なれば、我法と云う一物体ありと執ずる、我執のことを人我と云う。今は強ちそれにかぎらず、近く凡夫の我慢のことなり。人に負けまい劣るまいと、我情をつのるが人我なり。自覆とは、心に是非・邪正の分別の出来ぬような愚鈍なものでもなけれども、我慢の煩悩に覆われて、善悪・邪正の見分けが出来ぬこと、明らかな眼でも、ものをもってこれを覆えば、黒白をみることならぬがごとし。それゆえ遂に同行をあなどり、善知識を軽蔑して、親近せざるの失をまねくなり。同行善知識にはよくよく近づくべし。親近せざるは雑修の失なり。『御一代聞書』の百十章［三〇の二一・一五〇］に宣ぶ、これなり。この同行善知識の文、二点ありて、この引点の通点あり。同行善知識とよむこと、又同行の善知識とよむこと二点あり。同行のと「の」の点を加えれば、同行即善知識のことなり。同行善知識とよむ時は、同行と善知識と相違釈となるなり。此の二点、何れにても可なり。さてこの同行善知識の文、常に出づるが如く、天台の『魔訶止観四之二』に「知識に三種あり、一者同行、二には教授、三には外護」とあり。三種の善知識のあることを明かしてあり。其の中同行善知識は、我が友と、志を等しくして、同船に乗じたる如く、我が友を敬い、互いに切磋琢磨して修行を励むが同行の善知識なり。雑修の行者は、自力の功をつのる故に、兎角自他を相対して、我と人との修行くらべをする心がのかぬゆえに、我こそ天晴れ修すれと思うによりて、同行善知識を軽蔑し、近親せざるの失を出だすなり。

⓭楽近雑等、第十三失なり。楽は楽欲にて、好きこのむこと。雑縁とは、異学・異見・別解・別行なり。雑修の行者は、念仏申しながら、浄土門の教えはあさはかなように思って、異学・異見の聖道の修行をする人に近づくゆえ、他力念仏の安心を得ず、自らもあやまち人をもあやまたしむるゆえ、往生の正行を自障障他するといましめたもう。往生の正行とは、即ちこれ念仏なり。雑修の者は、好みて異学・異見の人に近づきて、自ら往生の正行を失するのみならず、更に又他をすすめ、他人の往生の正行障えることなり。和讃［一一の二九・二〇三］に「西路を指授せしかども」等と宣ぶ、これなり。問うて曰く。念仏はこれ専修正行な

れば、雑修の失は蒙るまじきにあらずや。答えて云わく。しからず。『化巻本』［一二の一八六］の御自釈では、「真に知んぬ。専修にして而（しか）して雑心なる者は大慶喜心を獲ず。」等、これ阿弥陀経真門の下の御釈なり。然れば念仏ばかりを称える処では、専修といわれるけれども、其の称えこころに定散心がまじるゆえ、専修にして而も雑心なるものと云わるるが、阿弥陀経当分の機類なり。問うて云わく。上来所明の十三失、雑修の人はみなこれを具するや。答えて云わく。（鎮西、西山の説云々略す）。雑修の行者は、此の十三失、みな悉く具足することなりと知るべし。（他派の説を否定す）。